



序 説

東洋文庫

(三月十七日日佛會館に於ける挨拶)

此の光輝ある御集りに列する光榮に浴し、諸氏の御臨席を辱うし、こゝに御挨拶を申述べの事になりました。若し、千九百十八年十月の初に、七年餘の後には、斯様な事があらうと、豫て知つてゐましたならば、私は、尙更深く感じた事でありませう。顧みれば私は、その頃地中海を航海して居りましたが、商船は十分の安全を期して戦隊を成して居たのであります。之といふのも、敵の潜行艇を現實に怖れて居た爲で、丁度十二艘位が一隊となり、其航路も極めて意外な道を進んでゐたのであります。今日も尙思ひ浮べて大切であつたと思ふのは、日本驅逐艦の事で、何時を計らぬ襲撃に備へて、商船隊を巡り、倦む事なく之を警戒し、又、商船隊は無燈で航行してゐるので、毎夜離散するのを、毎朝之を探し集めて呉れたのであります。さて、若し常人であつて、將來を卜し得る者があれば、固より之は佛眼によるの他はあり